

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返し、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さい構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

## 古代人と言葉

人間が他の生物と大きく異なる点の一つは、言葉を持つことであろう。言葉が情報伝達の最も有力な方法であることは、今も昔も変わらない。大昔(古代)には文字はなかったから、文字は情報伝達の手段ではあり得なかった。古代人の生活を思うに、とりわけ無形のものは推測による他はない。言葉は無形であり、使った痕跡が残らないから、古代人が言葉を用いたとしても、その様相を知る術はない。そこで古代人と言葉(音声)について、証拠はないが誰でも首肯できそうな単純な推測を試みる。

まずは、古代人に言葉が有ったかどうかだが、有ったと思う。もし無かったとするなら、いつから有り始めたか、という疑問が湧き、推測が複雑になるから、言葉は人類に元々あったと考える。更には、集団生活には言葉の役割は重要であったに違いない。体の機能から見れば、声帯の発達と言語が生まれるのに欠かせない。したがって、人間はいつから言葉を用いることになったかと言えば、声帯が発達して声の質が多様になり、かつ集団生活をするようになってから、と言うこともできよう。人間は言葉と集団生活で、他の動物よりも生存に有利な立場を築いた。

人間は発する声の音色が豊富で、音色の配列に意味を持たせるようにしたのが声による言葉である。他の生物も音を出して意思を表すものがあるが、音の様相は人間のものより遥かに単純、貧弱で伝達できる情報は乏しい。動物が出す音も言葉と言えるかも知れないが、ここでは取り上げない。

人間は声によらず、身ぶり手ぶりで意思を表すことがある。古代にもあった。これも広い意味で言葉と言ってよい。現代では、手の動きによる意思表示を進化・集成させた“手話”が通用している。これは目で理解する言葉と言える。古代ではこのほか、石や木を打ち鳴らして、何かの事情を伝えることもあった。これは声ではないが、やはり言葉の機能を持っていたであろう。このように、言葉には広い意味で多様な形態があった。

生活集団の内部では、言葉は共通に理解され、そこの言語となって定着し、後代に引き継がれていく。幼児が言葉を覚えるのは、親や家族との声のやりとりが初めて、耳で聞き、口から発することの反復で覚えていく。そこでは教育や学習という概念を意識することなく、親が教育し、子が学習するのは日常の事であった。子は親を見習った。子が危険な状態に遭遇すれば、親が助け、諫め、子は体験を糧にして次の危険に備えることができた。こうして子は成長した。これは正に教育と学習に他ならない。この点では他の動物も同じであった。人間も動物だが、言葉を持つという点で他の動物と違っていた。人間も他の動物も、親子の教育・学習の関係は、生きるための本能的な行動であった。

幼児が声による言葉を覚える経過は古代も現代も同じであろう。古代人の言語生活を思うに、現代人から文字をなくしたようなものであろう。更に近代化による語彙の増加を差し引き、生活様式を太古に戻せば、現代人は古代人のようになるであろう。古代人の声による言葉は、一人の口から出て他人の耳に入ることによってのみ伝わった。音声は保存や運搬の手段がなく、伝達の媒体は空気だけであった。

現代人の頭脳(思考機能)は、古代人に比べて進化しているのか。将来は更に進化するのか。私は昔も今も、将来も変わらないと思う。現代人は先人が獲得した知識や技術を受け継いでいるから、古代人より頭が良さそうに思えるが、このことは現代人の脳が進化した、即ち生まれつき思考能力が勝れている、からと考えるのは正しくない。現代人は近代化された生活環境の中で、誰もが9年間あるいはそれ以上の計画教育を受けるから、古代人より知識が豊富で技術に優れているのであって、脳の思考機能が優れているのではない。もし、現代の生活様式が原始的で計画教育がなければ、幼児は成長して古代の成人のようになるであろう。現代は知識や技術が進んでいるが、これは時の長い経過による蓄積の結果

であって、人間の脳は太古の昔から進化していないと思うし、現代人が古代人より頭が良いとは思わない。

古代人はやがて言葉を保存することを思いついた。道のない密林を歩いて、見通せる所の木の枝を折って道しるべにし、迷わずに帰ることができた。荒野では石を積んだりし、積み方に意味を持たせることもできた。これらの行為は言葉と同様の意味を持つほか、他の人にも理解され、社会的に役立った。岩場に見られる動物の絵は、描いた時代にその近辺にその動物がいたことを物語っている。

現代の情報伝達の手段は、音の他に文字や静止画、動画など多様だが、文字が使われ始めたのは、太古の昔ではなく、太古の昔に比べればつい最近と言える。動画などは昨日と言ってよい。

現代では文字は音に次ぐ有力な情報伝達手段となっている。文字の読み（書き）ができないことを文盲という。必ずしも誇らしい意味合いはないが、文盲とはある種の言語に対して言うものである。母語に堪能であっても、別社会の言語の読み書きができなければ、その言語に対しては文盲となる。私はロシア語などに対しては文盲であるが、一般に（文盲とは）知るべき言語に対して言うものであろう。

日本人の日本語に対する文盲は、現在は少ないが、かつては少なくなかった。日本で文字が使われるようになったのは、中国から漢字を取り入れ、日本語用の仮名ができてからだが、当初は使える人は識者が有力者であった。読み書きは学問であり、一般人の生活には必ずしも必要ではなかったが、読み書きできる人は時代と共に徐々に増えていった。

話が脇道に逸れるが、私は昭和中期まで文盲の人と生活した経験がある。身内を取り上げるのは大いにためらうが、祖母「きよ」は、読み書きができず、生涯文盲で通した。算盤（ソロバン）もできなかった。きよの幼少期は明治初期で、田舎暮らしであった。国民の義務教育が制度化され、学校が建てられたが、きよは就学せず、以後も読み書きを知ろうとはしなかった。きよは幼少期、家族や近隣の人との触れ合いから、耳と口で言葉を覚えた。少女期は近くの村の製糸工場に女工として働き、同僚らとの対話を通じて言葉の幅を広げた。生活に使う言葉は全て耳で覚えた。世帯をもってからは、息子（私の父）を進学させて教師にしたから、田舎の家庭としては知的環境には恵まれていた。昭和時代にはラジオがあったし、標準語を聞く機会もあった。読み書きソロバンを覚えるのに適した環境にあったが、きよは覚えようとしなかった。

読み書きができると記憶の負担が減る。備忘のために書き留めておくことによって、必要な時に参照すれば事が足りるが、それには幾分の時間が掛かる。きよはメモすることができない代わりに、生活に必要なことは全て頭の中に入っていた。半面、生活に必要なことは知ろうとしなかった。当時読み書きソロバンは学問であったが、きよは学問を覚えると自分の脳の記憶容量を超えると、本能的に思っていたのかも知れない。人に物事を訊かれて、普通の人なら書き留めたものを見たりして、多少の時間を経て答えるところ、きよは即答した。

物の数え方は、ソロバンができれば有利であろうが、きよはソロバンを持たなかった。しかし数は言えたり簡単な加減算もできた。九九（くく）はできなかったが簡単な掛け算はできた。2の倍は4、4の倍は8、・・・、64の倍は128と、きよが孫の私（5歳頃）に語ったのを覚えている。「64の倍は128」などは頭で掛け算をしたのではなく、“生活の中の言葉”として覚えていたものらしい。

明治初期の児童の不就学は、特に田舎では珍しいことではなかった。きよは勤労生活もしたし、周辺には学校を出た人もいたから、そういう人達と交流することによって耳から知識を吸収した。きよは学校には行かなかったが、学校教育の影響を受けていたことになる。きよは文盲であったが、実生活では他人に引け目を感じなかった。きよは明治初期から昭和中期まで、98年生きた。

きよの情報伝達の手段は言葉（音声）だけであった。きよの生き方は、古代人の生き方を思わせる。きよは、文字がある時代に文字とは無縁の人生を歩んだ。きよが生きた時代を、古代に置き換えてみると、古代に生き生きと生きるきよの姿が頭に浮かぶ。